

NEWSLETTER No.27

2018. 12. 3

I 第3回東アジアDAADセンター会議

▼参加報告書（川崎聡史）

▼発表報告（ジョン・ミンヒョク）

II European Fall Academy (EFA) 2018

▼概要

▼参加記（中村毬奈・篠原朝彦）

III TLPボン・サマースクールプログラム

▼プログラム概要

▼参加記（円光門・村瀬志穂）

IV 欧州研究プログラム (ESP)

▼プログラム概要

▼奨学助成金 成果報告書（石井萌加）

I 第3回東アジアDAADセンター会議

「1968年」とドイツ、および東アジアの現在
—第3回東アジアDAADセンター会議に
参加して—

地域文化研究専攻 博士課程
川崎 聡史

はじめに

2018年10月4日から7日にかけて、韓国・ソウルの中央大学校において、今回で3回目となる東アジアDAADセンター会議が「新世界の挑戦 新世代のイマジネーション 1968-2018」をテーマに開催された。ここには、日中韓のみならず、ドイツ、イギリス、ポーランド、イスラエルから研究者、および若手研究者が、多数参加した。

2018年は、1960年代に世界各国で盛り上がった社会的な異議申し立て運動が、ドイツにおいてその頂

点を迎えた1968年から、ちょうど50年目の節目の年であった。それを踏まえ、本会議ではいわゆる「68年運動」が、全体を貫くテーマとして扱われた。68年運動に関する最新の研究報告と、運動によるインパクトが重要な構成要素となっているとされている、現代のドイツ社会に関する様々な観点からの分析、およびそれに伴う活発な議論がなされた。さらには、68年運動が、おもにドイツと日中韓各国に及ぼした影響、そしてそのインパクトはどのように評価されてきたのか、あるいはそもそも評価されるべきかが、様々な形で会議での議論の的となった。ここでは、その会議の概要、およびそこから得られた知見について述べたい。

研究報告

本会議では、約30人の若手研究者によって報告がなされ、非常に多様な研究内容に触れる機会を持つ

ことができた。しかし、ここでは紙幅の関係上、日本人参加者の研究報告を中心に述べる。

川崎聡史は、「Die Jungsozialisten nach der 68er-Bewegung: Eine Skizze der kommunalpolitischen Aktionen」を題として、1969年から1972年までの「ドイツ社会民主党」（SPD）の青年組織であるユーゾーによる、地方都市行政との関わりとそれに伴う党指導部との紛争について扱った。ここでテーマとしたのは、68年運動直後の、若者の社会主義的な時代精神の高まりに影響を受けたユーゾーである。これまでの研究では、この時期のユーゾーの動向は、もっぱら彼らの非常に社会主義イデオロギイ的な思想と要求の内容、およびそれに基づく党内紛争への注目が大半を占めてきた。しかし、そうした思想に基づく社会主義社会実現の要求は、当時の西ドイツ社会においては達成不可能なものであり、最終的には、若い党员たちの党主流派への統合という結末に終わる。これに対して本報告では、地方自治体の政治へのユーゾーによる取り組みにおいてこそ、当時の彼らの68年運動に大きな影響を受けた主張が実現され得たということを、当時のユーゾー連邦議長Karsten D. Voigtに注目して新たに指摘した。

本報告に対するオーディエンスの反応は、全体としてポジティブなものであった。オスナブリュック大学のGyörgy Széll教授からは、「1970年3月の『社会主義ドイツ学生同盟』（SDS）の解散は、若者の運動の『地方政治化』と結びついているのではないか」というコメントを頂いた。それに対して、筆者は「SDSの解散は重要な要素であるが、1969年から1970年の短い時期に、SDS解散以外にもヴィリー・ブラント政権成立、ルール地方のストライキ、ユーゾーのミュンヘン連邦会議など重要な事件が立て続

けに起きており、それが若者たちの政治的意識に決定的な影響を与えたのであり、これらの事象の関係とこの時期が持った意味は、さらに詳細に検討されなければならない」と応答した。

ジョン・ミンヒョク氏は、「Die Frage der Vergangenheit und die Neue Linke」を題として、西ドイツの新左翼によるナチズムの過去との取り組みについて扱った。ここでは、当時の新左翼運動、特に左翼テロ組織が持っていた中東紛争におけるパレスチナへの連帯、およびイスラエルへの敵意への注目によって、等閑視されがちな彼らの過去との取り組みの様々な側面についての指摘がなされた。新左翼活動家たちは、ナチの過去と取り組む際に、「ナチズム」という言葉を用いるのではなく、「ファシズム」という言葉を多くの場合用いた。これはナチをそのドイツ特有の文脈からとらえるというよりも、むしろ高度資本主義社会における展開の必然的な帰結として捉え、その特異性を減少させる意図を暗に示している。普遍化されたファシズムとしてのナチへの理解は、自国の負の歴史と取り組むよりも、中東における現代の抑圧とみられるものに対する取り組みに重点を置かせ、パレスチナ解放運動との積極的な連帯によって、自国の過去を清算しようとする若者たちを、しばしば過激な反シオニズムへと導いた。しかし、こうした理解は、個々の新左翼組織の過去との取り組みを等閑視させていると、ジョン氏は指摘した。例えば、「共産主義者同盟」（KB）は、ナチの反ユダヤ主義の問題と積極的に取り組んだことが、無視される傾向にある。さらに、対象とされる「過去」はしばしばナチの過去に限定され、ドイツ帝国、およびその帝国主義による蛮行についての新左翼の取り組みは、ほとんど研究

対象となっていないことも指摘された。

安達亜紀氏は、「Wiederaufbau einer von schwerer Umweltzerstörung und dem Zusammenbruch der Industrie betroffenen Region in Ost-Deutschland」を題として、旧東ドイツにおいてなされた環境汚染を、再統一後どのようにして解決しようとしたかについて、東ドイツの都市 Bitterfeld を例として報告した。さらに、環境汚染克服の試みについて現在の日本との比較検討もなされた。特に東ドイツ地域における地下水汚染との取り組みと、福島第一原発事故後のそれを比較する試みは、非常に興味深い。

安齋耀太氏は、「Geschichte des Asylrechts」を題として、ドイツ連邦共和国における庇護権の誕生を歴史的に検討した。安齋氏は、難民危機以来議論の対象となっている移民の権利としての庇護権は、しばしば語られるようなナチズムのユダヤ人やその他の社会集団に対する迫害への反省から誕生したという議論に対して、他の歴史的可能性を模索した。むしろ、戦後のドイツ分断によるソ連占領地区から、およびその他の中東欧地域からの民族ドイツ人の西ドイツへの移入と受け入れに、法的根拠を与えるという側面があったことを指摘した。こうした指摘は、ほとんどあらゆる事象に際して、ナチズムを中心に据えて考えるという、戦後ドイツの歴史記述が持つ傾向に対する再検討であると言えるだろう。

北岡志織氏は、「Flüchtlinge als Opfer oder Lehrer der Realität? – Repräsentations-Dilemma in der gegenwärtigen deutschen Theaterszene」を題として、近年のドイツの演劇における難民の表象とその問題点を、エルフリーデ・イエリネクの作品を例にして分析した。北岡氏の分析は、2014年9月に

初演された『庇護に委ねられた者たち』 („Die Schutzbefohlenen“) を中心にしたかなり新しい作品を扱ったもので、最先端の研究の一つに数えられるだろう。報告においては、現代の事象を演劇で扱う場合の、現実の反映として、つまりある種のドキュメンタリーとしての性質と、演出された作品が持つ現実との乖離の間に存在する断絶とどのように向き合うかがテーマとなった。特に近年の試みとして、俳優としての訓練を全く受けていない実際の移民に演技させることによって、既存の演出手法を乗り越え、現実への接近を試みつつも、同時にそれもまた演出であることが示されるといった再帰的手法が指摘された。質疑応答では、ドイツの移民演劇の日本との関係について多くの質問があり、日本でも同様の演劇は移入されているものの、日本のローカルな問題と結びつけられることはなく、未だ模倣にとどまっている段階であるそうである。

「1968年」と現代世界

前述のように本会議では、「68年運動」と現代社会が中心的テーマとなった。ここではドイツのみならず世界各国、特に日中韓3カ国における運動の影響が、ほとんどの講演とシンポジウムの論点であった。

特に議論となったのは、グローバルな現象として「68年運動」を語る危うさである。ドイツと日本においては、時期は完全には同じではないとはいえ、明白な社会運動の盛り上がりが存在した。社会のエスタブリッシュメントに対する、若者が大きな役割を担った反乱は、高度資本主義国家であった両国においては確かに存在した。しかし、これをそのまま中国と韓国に当てはめることは、非常に問題があるこ

とが、中央大学校のKim Nury教授によって指摘された。特に、60年代の韓国で社会運動の顕著な盛り上がりは見られず、いわゆる68年運動は、韓国には存在しなかったとされた。しかし、68年運動の残したものとされる社会全体の「リベラル化」といった価値は、1987年以降の民主化のための運動と結びついている。そして、これに由来する市民のアクティビズムの伝統と、それによって社会を変えることができるという確信は、韓国社会に「運動社会」と呼べるような政治文化を根付かせている。こうした政治文化は、2017年の朴槿恵大統領弾劾にも象徴されているが、短期間での運動の盛り上がりと沈静化の極端さは、韓国社会の民主主義の未成熟さとも結びついているという指摘もあった。

中国においては、60年代の若者の運動として文化大革命が挙げられるが、これは1966年から1976年まで続いたものであり、1968年前後に頂点を迎えたとは言いがたい。北京大学のHuang Liaoyu教授もまた68年運動は中国に存在しなかったとしている。教授は、この原因を中国社会において深く根付いた儒教文化に求めた。既存の社会文化へのラディカルな否定という側面もあった68年運動が、中国であったならば、社会にとって破滅的な性格を持ち得たということ指摘し、68年運動に対する無批判な称揚に対して警鐘を鳴らした。

加えて、68年運動の歴史記述のナラティブにおけるヨーロッパ中心主義についての指摘が、東京大学の平松英人DESK助教によってなされた。西側陣営の西洋諸国における、60年代の社会運動の展開と社会全体の「リベラル化」の「成功」の図式が、一種のメタヒストリーとして非西洋諸国にも適用されることの持つ問題性は、常に意識されなければならない

だろう。冷戦終結によって西側陣営の自由民主主義の理念が覇権的性格を獲得した中で、68年運動は、市民社会の持つ民主的な潜在力の起源とその証明の「神話」の一つとして語られることもある。しかし、これには批判的な再検討の余地がある。そうした点で、東京大学の市野川容孝教授による、68年運動とベルリンの壁崩壊の関係についての検討の必要性の指摘は、重要であるだろう。西ドイツにおいては、68年運動で「証明」された市民運動の能力が、1989/90年には東ドイツでも民主的な無血革命によって証明されたというような、近年見られる理解もさらに詳細に検討されるべきであるだろう。

さらに、特に未だ冷戦構造の残滓が現存する東アジア全体の現在の情勢に対して、西側西洋諸国のサクセス・ストーリーを、そのまま当てはめることは全くできない。日本では、68年運動を経たとしても、ドイツのような自国の負の歴史との批判的な取り組みが、公共空間で中心的立場を獲得するには未だ至っていない。朝鮮半島においては、南北分断が、厳然たる事実として韓国と北朝鮮の社会に、未だに相当な負担を強いている。中国においては、共産主義体制と社会の急激な資本主義化という2つの要素が、今後どのような展開を迎えるかは見通すことができない。こうしたことを踏まえた、Kim Nury教授による「東アジアには3つの問題がある。日本の過去と朝鮮の現在と中国の未来である。」という発言は、現状を端的に示す非常に重要なものであった。これらの問題と取り組むために、現代の西洋の民主的市民社会の「出発点」とされることも多い68年運動の意義、それが残した影響、その因果関係について検討することは、ドイツの文脈のみにとどまらず、東アジアが抱える問題を民主的に解決するため

の一助となるだろう。そうした点で、本会議は非常に示唆に富むものであり、意義深いものであったと言える。

最後にこうした非常に重要な機会を与えてくださった、DAAD、中央大学関係者の皆様、および東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターの皆様に感謝を申し上げて、本報告の結びとしたい。



川崎氏の研究報告

東アジアDAADセンター会議 発表報告

地域文化研究専攻 博士課程
ジョン・ミンヒョク

私は「過去問題と西ドイツ新左派」という主題で発表し、まず過去からの業苦として終始戦後世代の意識を支配してきた罪悪感と、特に60年代中盤以降過去問題の解決策として共有されていた反ファシズム論を、西ドイツ新左派の歴史認識において最優先に考慮すべき特徴として規定した。具体的に言うと、前者はナチス・ドイツによってドイツ像自体が汚れてしまったことを意味すると発言した。つまり親世代の道徳的権威の失墜のため頼れる理想的な模範の不在が発生し、結局ドイツ戦後世代にアイデンティティの危機が起こってしまったことだと主張した。また後者に関しては、ファシズム論のような唯物論的経済決定論の観点からユダヤ人を人種・文化・宗教的民族体ではなく、単一なブルジョア階級の一種として捉えたことを指摘した。加えてホロ

コーストを、資本主義の危機の局面で大衆（特に小ブルジョア）の不満が反革命的心理に転じて反ユダヤ主義が形成され、独占資本の代わりに資本主義の化身としてユダヤ人を虐殺してしまった「失敗した階級闘争」として把握する立場さえ新左派勢力の中で登場したことを明示した）。

無論、過去の克服に対する新左派の業績を明確にする作業も必要だと考え、そのために1950年代末以降展開された過去との取り組みを紹介した。1958年度のウルムの特別行動部隊の裁判から始まって、アイヒマン裁判（1961年）やアウシュビッツ裁判（1963年-1965年）などの法的処理過程がテレビなどのマスメディアを通じて多数の大衆の関心を集めながら展開されたが、同時に持続的な第三帝国の公論化に対して疲労を感じてしまう傾向が多数の西ドイツ人に共有されたことに言及した。さらに1959年度のケルン・シナゴグ事件を起点とする一連の反ユダヤ主義的騒動や、過去という足かせからの解放をスローガンとしたドイツ国家民主党（NPD）の1964年・1968年の州選挙での善戦などが示すように、当時の保守化・右傾化の激化によって過去が忘却される可能性について考察するようになったことも指摘した。そのような保守的トレンドに対して、

例えば1959年から1962年にかけて社会主義ドイツ学生連盟の主導で開催された博覧会では、ナチ体制の特別裁判所のメカニズムが公開されるとともに、ドイツ連邦共和国とナチス・ドイツの司法機関での人的連続性も暴露されたと報告した。結論として言えば、50年代後半から60年代中盤にかけてナチス犯罪の問題を持続的に提起したことを西ドイツ新左派の功績として位置づけるべきだと主張した。

しかしながら西ドイツと第三帝国の人的連続性に専念する傾向が、60年代中盤以降経済的観点からナチス問題を解釈する方法論によって代替され、特にホロコーストの主な原因として認められている反ユダヤ主義の重要性を捉えなかったこと、そして極端な反シオニズムの導入によってイスラエルをナチス・ドイツと同一なファシズム体制として把握したことについてのドイツ学界の批判を伝えた。私は西ドイツ新左派の抽象的・脱歴史的・現実執着的な歴史認識を再度強調しつつ、ユダヤ人のような他者ではなく罪の意識から離れたかったウチを中心に置いてしまった西ドイツ戦後世代の自己中心的心理運動に注目すべきだと論じた。

最後に既存の研究の限界について報告した。まず社会主義ドイツ学生連盟と70年代のテロ組織や毛沢東主義党派（K・グループ）との接点に没頭してしまい、暴力主義や反理性的行動主義などを68年運動の重大な特徴として位置付ける傾向が優位を占めるようになり、結局新左派勢力が主張していた新しさを、ただの神話として格下げする効果をもたらしてしまったと論じた。そしてK・グループの反ユダヤ主義問題を提起する際、K・グループの中で早い時点から反ユダヤ主義問題に取り組み、80年代の分裂期を

経てドイツ左派の反シオニズムを打倒することを重要な目的とするアンチドイツグループという極端な親イスラエル派を輩出した共産主義同盟（Der Kommunistische Bund）に重点を置いている研究者が相対的に少ないことを指摘した。さらに、テロ組織とK・グループの暴力主義・反理性的行動主義・民族主義などを68年運動の重大な特徴として強調することにより、50年代以降若い世代によって活発に展開された反再軍備や反戦主義的傾向の重要性、そして50年代の経験を経て議会外反対勢力（APO）や社会主義ドイツ学生連盟（SDS）などのような68年運動の主役によって重要な議題として収容されていた平和主義の影響力についての学術的関心が相対的に薄いことにも言及した。

私の報告に対してGyörgy Széll教授は当時西ドイツ戦後世代が直面していた過去問題の緊急性を再度確認させた。そしてClaudia Derichs教授は私が提起した脱歴史性を補足することを求め、それに対して私は、ユダヤ人虐殺が当時の歴史的な文脈から離れて再解釈されるにつれて当時の犠牲者の立場に立って彼らの苦痛を記憶する共感が失われることを指摘した。



ジョン氏の研究報告

II

European Fall Academy (EFA) 2018

ドイツ・ヨーロッパ研究センター（DESK）では、2007年より、ASKOヨーロッパ財団、オツツェンハウゼン欧州アカデミー（EAO）、トリア大学と協力して約2週間のEuropean Summer Academy（ESA）を開催してきました。ESAは英語を使用言語とし、ドイツ・ザールラント州にある欧州アカデミー（EAO）を拠点に行われます。ヨーロッパ各国のEU研究者による講義のほか、ブリュッセル、ルクセンブルクなどにある欧州議会、欧州委員会などの諸機関やドイツ学術交流会（DAAD）本部訪問等を行います。

欧州研究プログラム（ESP）をはじめとする修士課程の学生、教養学部前期課程ならびに後期課程の学生から公募で選ばれた参加者に対し、DESKが渡航費の一部およびセミナー参加費を助成します。2018年には、8月8日から18日にかけて「The European Union and East Asia in International Relations and Global Governance」をテーマに開催され、本学から17名の学生が参加しました。東京大学大学院総合文化研究科をはじめ、公共政策大学院、経済学部、農学部などから修士課程および学部後期課程の学生が参加しましたが、教養学部前期課程からも2名の学生が参加しました。さらに2018年はトリーア大学（ドイツ）と Gent 大学（ベルギー）との共同で開催され、活発な交流が行われました。

EFA2018 参加記

教養学部 文科一類
中村 毬奈

the insight of the complex structure of the current affairs of the world. I didn't have a deep background knowledge on some of the subjects and had to read in advance about the specific topics but I realized that finding relations with the other existing problems are much more important. Comprehending the challenges to learn the whole image of the international relations and the complexity of the connection of the individual issues, I will discuss in this paper what I have learned and understood during this summer academy.

1) Introduction

In this year's European Summer Academy, there were various lectures and interactive activities namely; lectures at the academy, at the excursions, and student presentations, that were strongly concerned with the present situation of the world and about the current risk that the EU is facing. In addition, there were also topics that were strongly related to the future steps to solve the critical situation in relations to various issues that the world is facing. Before I received the first lecture and just by simply looking at the program overview, I had expected to receive lectures that are specifically concerned with the EU and the possible measures to which would be necessary to solve with individual issues that are being raised in the global society, in concerns with the group of nations. However, I believe it went far beyond what I had expected and this lecture enabled me to grasp

2) Regarding the international relations and global governance

In my international relations lecture at university during the last semester, I learned that the global society is an anarchy without a single governing power unlike individual governments in the world: and that is why it was essential for each state to cooperate and compromise so that they will be able to reach a comprehensible agreement on the greatest common major. Exception of the realist and liberal views of anarchy, that is how simple the introduction of the idea of the system of the global society was defined in the lecture, and it didn't mention further even in my political theory textbook. Therefore, I was not exactly familiar with the idea of "governance" even though it was supposed to be the main concern

for this seminar. Thus, the introduction of the concept was an eye-opening idea to me. Beginning on the international relations model and the fundamental concepts and the change in statehood, I was able to see why "governance" is such a significant factor in every aspect when considering issues concerning the global society. This was exactly what I strongly understood when receiving the following lectures which is concerned with various fields of studies in the seminar as well. The advent of highly skilled telecommunication techniques and the internet spurred the speed of the globalization. As a result, the term "international" became a misnomer for the current situation, and the word "global" became the precise term to express it. Due to this drastic transition, the vast global market economy and global issues emerged, involving many actors than ever. No action or policies that are made by any country in the world will affect solely the country itself but it will inevitably affect all the surrounding nations in various and unpredictable ways. From this lecture, I understood the reason why the importance of governance became articulated in the change and at this moment I thought about how it could be applied to the specific events and how could it be analyzed by taking the idea of governance into account.

3) Concerning China's sharp power politics

The idea of soft power and hard power is widely known as they were proposed by an eminent American scholar Joseph Nye, but the newly evolving type power namely, sharp power, was very intriguing and proved to be much more effective and elaborate than the former two. The definition of sharp power is unprecedented and increasingly sophisticated foreign efforts to influence other nations by utilizing tools that ostensibly seem harmless. The lecture first started with the introduction of China's world view which are for example: the liberal international order is obsolete, the West is declining but China is evolving, and the idea that China must become the next rule maker in the world, made me terribly surprised and even to lose my words. Even the thought of a country which has the largest population and the 2nd largest GDP is pursuing several steps to accomplish these

goals are simply terrifying and made me feel very pessimistic about the future at first sight. Yet I still realized that there are many decisions that the rest of the world can make to ensure China's rise is peaceful and to avoid exploitation from the Chinese government. However, countries which has a substantially stable economy and authority in the global society can have a strong attitude towards China but to countries in which China is now encroaching by a vast amount of investment are countries; namely countries that are included in the "One Belt One Road" initiative, that are relatively fragile and economically dependent on developed nations, so it will be a challenging task to avoid these countries from becoming sort of an "appanage" to China. The United Nations and other international organizations officially consider that all countries that consist the world are equal, regardless of their financial power or authority inform the past, and influence they exert to the world. So, if one country is able to receive agreements from other countries, decision making in the global society would be highly influenced by that country which exerts a large influence towards countries which stand on their side. I felt that the international society is still unaware of this fact or is too occupied with making restrictions to avoid their country from becoming under control by the Chinese government. There was a question towards the lecture about why the global society hadn't considered the Chinese government's moves as a threat. However, the professor answered that all the political actions that are made now became so apparent and influential in recent years that the global society is unable to take an action towards it. Still, I believe that it is not too late to make a strong measure towards these actions and to also to advocate towards other developing nations against it. It is of course that other nations do not have a right to intervene in a nation's policy making but still I believe that developed nations do have the obligation to do so.

4) Two student presentations and my hardships and findings

With exception of the PEAK classes which are courses that are offered in English, and my first-year

seminar class, I believe I never had the opportunity to do a presentation, much less a joint presentation with other students so overall was an anticipating event for me before the seminar started. However, the presentation was successful due to the hard work and support from my group mates, I believe there were many hardships while conducting it and here I will analyze what became the obstacle and what is necessary to conduct a convincing and clear presentation.

The first presentation was about foreign direct investments. I was assigned to focus on China's increasing investment on Germany and how that affected the in the German government in ways such as politically, economically, and in establishing new regulations. What surprised me the most when researching the topic was that there was a drastic increase in Chinese investment in various German businesses from 2015 through 2016 and I continued with the research focusing on the specific time. However even from official documents from the German government and from other major research institutes, despite having spent a lot of time on research, other group members and I were not able to pin down what was the main cause of this increase. Therefore, we could only state the possible causes behind the occurrence during our presentation. At this point I understood that even though there should be a meaning to whatever change in figures it is not always simple to define the exact reason or the cause behind it: as there are situations where cannot be made public or is simply not. In addition, I also understood why detailed analysis of individual data becomes most important when determining the reasons of a change in the situation. The presentation itself went good as expected but one postgraduate student from Trier University, who was responsible for introducing and concluding the presentation, made such a perfect presentation that it made a strong impression on me. It left me thinking for a while about why can this person can make an eloquent, clear and natural presentation. Later I realized that this student had not made a complete script of the presentation but instead he had also done research on the areas where he was not entirely responsible for. I didn't take any classes on economics or financial engineer-

ing nor had any preliminary knowledge apart from the contents of the reading assignment I had before attending this seminar so it made me feel acutely that there was a significant amount of differences in knowledge and made me strongly feel that I need to acquire more basic knowledge about variety of studies in order to make an interesting and accomplished speech.

The second presentation I had to give was on global climate policies and how the US government involved in the process from; the Kyoto protocol, Copenhagen Agreement, Durban platform, and the recent Paris Agreement and Parxit (exit from the Paris Agreement). This time thankfully, I had a broad background knowledge about climate change and policies as they are part of the curriculum in geography and was a topic that was mentioned in my international I relations class, I was able to conduct research from a higher level and was able to summarize the contents of the Paris Agreement and the US party's Nationally Determined Contributions (NDCs) fairly easier than I had expected. Due to the limited amount of time given to each person to speak during the presentation, I was unable to speak much about what is the profound difference between the former climate change policies but as I was researching, apart from what was broadly broadcasted by the media, I was able to find out there are many key issues in the agreement and made me want to research more into depth about each agreement and about what each delegation proposed during the decision-making procedures.

5) The lectures given on the excursions about trade with EU-Japan and EU-South Korea

At the European Commission, we listened to the current trade situation between EU Japan and EU South Korea. The phrase that the lecturer emphasized in the lecture concerning EU Japan relations is that they both share the same values such as; democratic values, environmental concerns and consumer protection, and thus are strategic partners. This phrase left a quite a large impression on me, because it made me reconsider the current trend in the world, where multiple countries including large states such as the US and the UK, which both decided in disa-

greeing with the decisions that enabled global relations in harmony and pursued their own countries' benefits. In such case, relations between the EU and Japan could be seen as a type which follow the norms that were the mainstream for a couple of years before. In addition, in the lecture also mentioned about how most of the tariffs will eventually be liberalized and the rapidity of the ratification of the EU-Japan economic partnership agreement. Where most negotiations usually take over a year, it was explained that it only took three months to complete and it was ratified a day before the world summit, to advocate a strong message towards the international society on valuing fair and free trade. Despite the current circumstances where the amount of trade between the EU and Japan is not very large, in order to change the idea of national particularism and to avoid the expansion of China's presence in the European region, especially having sharp power politics in mind, I strongly felt that it is essential to strengthen the ties between the EU and Japan especially at this time. Furthermore, what interested me from a slightly different view, is the political and diplomatic similarity of Japan and the EU which also mentioned in the lecture. The findings where Japan and the EU both have diplomatic concerns in the actions of other neighboring states such as: Russia's actions in Ukraine and China's actions in the East China Sea, individually is quite evident because it is widely reported in the media but to view it as a commonality was somewhat new and was also convincing.

Moreover, it was very interesting to listen to the lecture about trade relations with South Korea and the EU. In most cases, concerns towards trade is focused on trade deals with the country you belong and with foreign countries, so I was curious about what are the situations between the EU and South Korea. It is a basic knowledge but it was surprising to learn that the FTA between South Korea and the EU is the first trade agreement with an Asian country that went further as to lifting trade barriers.

6) The talks and questions at the US representative of the EU

One unique aspect of this seminar I thought was

that it enabled participants to view the same situation from various countries' views, for example providing an opportunity to listen to lectures concerning the same trade agreement with the EU and Japan from both perspectives. I believe that this opportunity was initially aimed to do the same. However, I was not entirely impressed at the way the US representatives of the EU avoided answering questions regarding specific topics that the EU is concerned about and to what kind of attitude the current US administration has on EU relations. The representatives somewhat provided participants of the seminar, about what position does the US has towards the EU but they never referred to the actions and words and even the name of the current US president. Furthermore, they never tried to answer specific questions without mentioning the typical phrase that they comply with the current administration's ideas. It is understandable that some questions cannot be answered as it may be confidential or to avoid any sort of conflict but I cannot help thinking that there are some ways that would enable the representatives to answer questions in a sincere way. For example, there was a question towards one speaker of the representatives about the attitude towards climate policies after the exit from the Paris Agreement, but the speaker wasn't either sure of the decisions or tried to avoid it, by stating that there is a team which specializes in that area and they know more than that speaker does. Many participants also raised questions but they were also not able to receive a persuasive answer to it. Unlike other lectures, Chatham House Rule was applied to the lecture at the talks and questions at the US representative's office. The initial aim of this rule is to enable anyone who is participating in the talk to speak and to question freely about the topic without being restricted to one's positions. Thus, I wished they had complied with the aim of this rule, and had answered the questions in a different way than they had done.

7) Climate Policies

Lectures on climate policies began with the introduction of the definition of "sustainability", the earth system theory and to the principle of sustainable development, moving on to the tools to measure sus-

tainability, three pillars of sustainable development and about individual summits and what was agreed upon each time. In the part where the lecturer mentioned about tools of measuring sustainability of the world, he mentioned about virtual water, the ecological rucksack and water footprint. I was familiar with the first two but I wasn't sure about the final one so it was interesting to learn there are also three types of water footprints namely ; blue, green and grey. The lecture went so far to mention the new idea of Anthropocene where this is the idea how humans are viewed as the main change agent. Which was something, in addition to Ulrich Bech's theories on risk society, that I learned last semester so I was quite familiar with the ideas so it was significantly less challenging to engage more freely in questions and discussions. In this lecture, the lecturer compared what was agreed upon each summits and what obstacles it faced so it enabled me to grasp a clear image of each conferences that were held to solve climate change. Through this lecturer, I again came across the question I initially had last semester about why people cannot agree on the solutions on climate change. I believe the reason is mainly due to the individual profits that each country wants to protect and its level of authority they have against the global society. However, when I was listening to this lecture, I also realized that making policies to stop climate change is almost equal to finding the greatest common major among over 196 countries in the world. I understood that is why it takes so much effort to find what is the common benefit for all.

8) Excursion to the European Court of Justice

Excursion to the European Court of Justice was probably the most memorable event and excursion of this seminar. Having never been to Luxemburg before, it was simply exciting to see the beautiful city as well as the lectures and the guided tour. Seeing the large courtroom and its massive library with many documents, I could feel how many people; such as judges, policy makers, interpreters and even ordinary people, from around Europe are working hard to advocate their ideas and to prove the international society about what justice is and to make a distinguished

change in the future. When I saw the individual rooms around the courtroom, which are reserved for interpreters in the large courtroom, I strongly felt the importance of acquiring multiple languages in order to live in a global society. Machines that interpret languages have developed so much that they can easily interpret normal conversations but I believe that it is still not sufficient. Having simple conversations and persuading others with your own words and ideas are different. The fact that English is only available in 80-90% of the court cases at the ECJ and French is the official language made me realize that.

9) Time with students from Trier University and free time

Having not so much free time in the day, as there were mainly lecturers and meals afterwards, I didn't get to spend a lot of time with other students, but still I got to spend a quite a lot of time with students from Trier University during the last day of the seminar. They were kind enough to show me around the city of Trier and the major landmarks. Visit to the Electoral Palace, Konstantin Basilika, Liebfrauenkirche, and Karl Marx museum all became memorable events. It was also very interesting to interact and to have many conversations with the students, as they were majoring in many fields and had a diverse background. Most of the students were from countries which you would not hear much about in Japan and thus had many different ideas towards the occurrences in the world, and it was also very interesting to discuss with them during mealtimes and to see things from their perspective.

Mainly on the last two days of the seminar, I could spend free time with other students from UT and Trier. Majority of the students were in graduate school so they gave me important advice on how to spend the undergraduate years and what would be necessary when you are going to work or either to continue with your studies. There are not many occasions where you can receive such sincere words and advice from people who are over 6 years older than me so it was very interesting and significant. It was also exciting to have conversations on many things during mealtimes and tea breaks, and I even got a

chance to learn how to play a game of pool(I didn't improve as much).

10) Things that were characteristic to this seminar

I believe that this seminar was characteristic in the way that it is mainly addressed for graduate students and undergraduate students who are in their junior or senior year. Each topic that were raised in all the lectures were highly technical and advanced that it motivated me to research more and to learn more about each of them. All the lectures went far beyond explanation of individual fields but it also showed a clear connection to what was discussed earlier. Being able to make connections between each was highly interesting as you can comprehend the complexity of the issues that are occurring in the world and because it also enables you to see the same fact from diverse dimensions. In addition, having interdisciplinary learning, namely workshops including presentations also arouse intellectual curiosity even more. By researching for topics, which you had only viewed from the country you live in, from a different perspective was very challenging as meticulous research was needed and it took quite a lot of time to read each articles and research papers but, it is something that you would not have a chance to do in classes at university so I really enjoyed it.

11) Possible changes that could be made

All the events, lectures, workshops and excursions were very well planned and interesting to me so I have not much to mention about what to improve. However, as for the workshops including student presentations, since there were only few hours to research, make power point slides in the day and then make a presentation the next day, I wished that there were more time to analyze the data found during research time and make elaborate presentations. Ideally, I think it would have been possible to make presentations more interesting and rich in content, if students had the entire seminar, besides the time for lectures, to complete our research and have a big presentation day on the last day of the seminar. In addition, I thought that it might have been much eas-

ier to understand and to raise more questions, if each group were able to make an outline of their content of their presentation and hand it to the audience before making their presentation. Furthermore, the only research medium that was available was the internet, so I thought that it would have been better if we had access to books as well.

(Other than this, I wished that the cafeteria provided more meat dishes and apple strudels!)

12) Conclusion

In this seminar, I believe I was able to acquire a variety of things that are not simply limited to studies and knowledge but also to have a slight overview of how the global society functions. All the aspects of it proved to be beyond my expectations and it greatly enabled me to broaden my perspective and realize what I want and need to study in the future, and what I want to pursue after I studied at university. Finally, I want to thank all the teachers(especially Professor Morii), members of the staff and all the people who made this seminar such a splendid event.



EFA2018参加者

EFA2018 参加記

公共政策大学院
篠原 朝彦

本研修において得た知見の一つは、EU諸国にとっても地理的な距離にも関わらず、中国そして日本への関心を以前よりも高めているということである。一つには、一帯一路に見られる中国のアフリカ、ヨーロッパへの事業機会創出と権勢拡大が機会と危険の双方を創出していることへ注意を尖らせていることが顕著であった。EUは自らをシビルパワーとして規定する。

シビルパワーとは従来の軍事力経済力といった手段ではなく、規範を通じ大国政治でなく国際社会が市民社会的規範に則り行動するものになる様に行動することを自己規定する。この点においては、EUは中国の進出を脅威として見ている。史的唯物論に則る中国は人権や法の支配といったEUの掲げる価値については等閑視しており、むしろ物質的なハードパワーにおける勝利がこれら理念の価値に優越すると考える姿勢が、EUにとって懸念対象になっている。他方で、金融危機以降のG20の枠組みをはじめとして、中国は国際社会の安定においても重要な役割を担いつつあり、その点ではパートナーの位置付けもされている。

このような中国への緊張感はシャープパワーへの着目によってなお一層のものとなっている。シャープパワーとは露骨なハードパワーの行使ではないが、

文化的魅力の発信といったソフトパワーの様な融和的なものでもない。シャープパワーは世論操作や巧妙な圧力などによって政策の変更を迫る戦術に関わるものである。ことに中国がAIIBなどの設立によって国際レジームに中国主導の制度の形成を図るに至り、トランプ政権の誕生以来アメリカがそれまで奉じてきた法の支配や自由貿易制度などへのコミットメントが急減するにつれてEU諸国がシビルパワーとしての自らの存在感に危機感を持っていることが度々示唆された。その関係の中で、日本の成熟した民主主義国としての位置付けが重要性が増している。EUはその経済協定において人権条項を設けているが日本とのEPAにはこれを設けず、むしろ基本的価値を共有する戦略的パートナーとしての日本の位置付けを確認している。これらに見られる様に、EUは根幹的価値としている民主主義や法の支配といった価値観を担保する国際レジームの揺らぎを強く意識し、アメリカ以外のパートナーとしては日本を強く意識しているのが確認できる。日EU間のEPAはそれ自体経済規模として最大という点のみならず、そのシビルパワーとしての自己規定を強化しようとしているEU側の狙いがわかる。

EUにとってのシビルパワーとその根底にある諸価値は今、内外の様々な脅威にさらされている。歴史的にみて、地域的危機は共同対応を進める景気となり、EU内の結束を強化することを可能にしていたが、金融危機以後の財政危機、移民問題は今なお完全な解決をみてはおらず、EUの正統性をその構成国間で揺るがせにしている。EU諸国ではこの危機を契機にポピュリスト政党の跋扈を許し、危機によってその正当性が危ぶまれた。それに加えて、従来よりEUはその「民主主義の赤字」から官僚主義

という批判を受け、欧州議会にはイギリスのUKIPの様にEU自体への批判者が増えている。国内外からの挑戦に対してEUは説得的な処方性を示し得ておらず、その存在感は揺らぎつつある。

こういった危機に直面して、EUが内部の支持を維持し、かつ国際社会に対しそのシビルパワーとして発揮できる領域を温暖化対策などの環境問題に求めたのは妥当なことである。第一に環境問題は、例えば移民問題とは違い難民者の人権と国家負担の相克というジレンマをそこまではらんでおらず、EU内の世論においてコンセンサス形成が見込みやすい。また環境問題への対応の正当性は概ね国際的に合意されており、シビルパワーとしての自己規定にも叶う。

実際、京都議定書・コペンハーゲン協定などCOPでのEUの行動は他国よりも率先した行動力の伴うものであった。京都議定書では一番最初に数値目標を提示し、ロシアの議定書への参加を促した。その点で、EUは環境問題には国際社会のプレイヤーとしての位置付けることに概ね成功したと言えるのではないだろうか。言い換えれば、EUは環境問題においてはモラルリーダーシップを発揮し得ていると言える。

ただし、EUが他の問題において同様の行動を取れるかは疑わしい。似た問題に海産資源などの資源保護問題がある。EUはこの分野においても例えばマグロなどの漁獲制限を主張しているが、この分野で十分な影響力発揮は未だに十分とは言えない。また、個人データ保護においてもEUは独自の規制を施効させているが、それが国際的に広がりを持つか否かは未だ待たれるところである。

EUにおけるシャープパワーの行使にかかる危機

感においては、中国の他にロシアの存在が挙げられる。ロシアはより露骨に、選挙干渉といった形でシャープパワーを行使し、ウクライナ問題ではEUへのガス供給は大きく脅威にさらされた。実際、EUは天然ガスの供給においてはロシアに大きく依存しているところであり、ウクライナ危機の後においてもノルドストリーム2というウクライナを迂回したパイプラインの建設がようやくであり、北海油田を始めとしたエネルギー自給の動きも現在は成果を生むに至っていない。

この点について日本政府は原子力発電所のトップセールスでエネルギー自立供給を促進しようとしているが、これも順調とは言えない。こういったロシアへの危機感を背景に、プログラム中のEU委員会での講義では、より伝統的な安全保障領域において日本との連携強調の必要性がのべられている。しかし、日本は伝統的にシーパワーであり、ロシアは伝統的にランドパワーである。また日本は長年抑制的な安全保障における対外協力政策をとってきており、アメリカ以外とはイギリスとの共同軍事技術開発が端緒についたばかりであり、未だに模索されるべき点と思われる。もちろん、PKOや開発支援における協力は重要な協力分野であり、日本の国際貢献という意味においても重要ではあるが、より軍事面に近い協力となると兵器の開発協力などの分野に活路が見出されるのではないか。最近日本はイギリスと共同での軍事演習を実行したが、これはむしろ、イギリスのEUらしくないところによってもたらされた点が大であろう。

本プログラムでは現地学生との活発な交流に加え、特に現職の外交官と意見を交わす機会に恵まれた。学生とはEU市民の生の声として環境問題など

諸問題について日本人の味方と異なる点を観察し、
たのは大きい収穫であったが、現職の外交官との意
見交換では、むしろ現職の外交官が時に厳しい質問
と感じた。

にどのような「elusive」な答え方をするのかという
ことを観察しえたことが大きい経験とを感じる。その
elusiveな解答をどう解釈するかというのは参加者

の中で議論になり、これは後の研究において資料収
集の際にインタビュー手法として考えるべきことで
あると感じた。

III

TLPボン・サマースクールプログラム

2018年8月19日から9月6日にかけて、DAADドイツ学術交流会およびボン大学からの支援を受け、東京大学教養学部前期課程のTLPドイツ語履修学生を対象とした「ボン大学TLPドイツ語サマースクール」が開催されました。参加者はグスタフ・シュトレゼマン・インスティテュート（ドイツ・ボン）において約2週間にわたってドイツ語集中コースを受講するとともに、ドイツを中心としたヨーロッパの文化・歴史・社会・政治に関するワークショップにも参加します。往復の航空運賃（上限875ユーロ）とプログラム参加費・滞在費がDESKからの援助の対象となります。最新の情報については、センターHPを随時ご確認ください。

プログラム参加記

教養学部 文科三類
円光 門

ドイツ語授業の感想

初めはドイツ語で自己紹介をすることさえも戸惑っていたが、最終日にはほぼ全てドイツ語で行われる授業に慣れてしまっている自分に驚いた。欲を言えば、コマ数はもっと多い方が良かったと思う。

午後・週末のプログラムの感想

午後、週末のプログラムは、どれも有意義なものだった。Jared Sonnicksen博士の講義では、現行の

憲法がヴァイマル憲法の反省によってできたものだから、「現状を知るためには過去を振り返らなければならない」というテーゼが強調された。一方で、講義後私がSonnicksen博士に、ナチス台頭を生んだヴァイマル憲法の弱点は、不信任決議で政府が解体しやすかったこと、党の数が多すぎてまとまりがなかったことの他に何があるかと質問したところ、ヴァイマル憲法の弱点が直ちにナチス台頭につながったわけではないという答えを頂いた。

Sonnicksen博士は、hot-stove effectという、猫がストーブに当たって暑い思いをしてから、スイッチの入っていないストーブをも避けるという論理的誤謬を紹介して下さり、私はナチス台頭の理由が決して一枚岩ではないことを確認できた。

Spielmanns博士のEast Meets Westというワークショップでは、東洋と西洋の文化の違いをドイツの大学生と話し合ったが、その中で特に印象的だった

たのは、文法と思考回路の関係である。動詞を始めに持ってくる英語で書かれる論文は比較的単刀直入なのに対し、終わりに持ってくる日本語の論文は比較的回りくどいが、同じく動詞を終わりに持ってくるドイツ語ではどうなのかと私は発言した。すると、Spielmanns博士は、ドイツ語の論文も英語に比べやはり回りくどいと答えて下さった。同じ西洋でも英語とドイツ語で思考回路の違いがあるように、我々は一概に西洋対東洋という二項対立で語ることはできないのだと、再度痛感した。

Rohrschneider博士のWar and Peace in Early Modern Rhinelandという講義では、戦争と平和は表裏一体で、両者は影響し合いながら発展してゆくという考えが示され、大変興味深かった。私はこの考えからヘーゲルの弁証法を連想したので、講義後それを博士に伝え、私の連想は間違っていないとおしゃった。だがそれでは、平和は戦争がないと達成されないという結論に至ってしまうのではないかと問うと博士は、人間にとって平和は理想だが、戦争は現実なので、実にその通りである、と答えた。非常に考えさせられたやり取りであった。

日常生活・自由時間の感想

自由時間で私が一番したかったことは、ピアノを練習することだった。日本に帰国してから二週間後に、オーケストラとの協演を控えていたからである。まずは初日に午前中のドイツ語の先生に、このあたりにピアノが弾けるところはないかと尋ねると、その先生は幸い音楽好きだったので、知り合いの楽器店に電話をし、ボン市内の三つの教会がピアノを弾かせてくれるという情報を下さった。私はこれら三つの教会に電話して頼むことになったのである

が、良いドイツ語の勉強になると思い、想定されるフレーズをリスト化して準備した。また、どうしても相手の言うことが分からなくなった場合は、*leider verstehe ich nicht, meine Lehrerin spricht mit Ihnen* と言ってドイツ語の先生に電話を渡すことにした。しかし実際やってみると、向こうの言っていることは一つも分からず、会話が一往復も成り立たない間に先生に助けを求めるという結果になってしまった。

宿舎から一番近い教会からは工事のため、二番目に近い教会からは神父が出張のためにピアノを貸し出すことはできないと告げられ、宿舎から最も遠い教会のみがピアノの使用を許可してくれた。自由時間に教会を訪問すると、管理者の男性とその家族が暖かく出迎えてくれた。この教会はロシア正教会で、彼らはモスクワ出身のロシア人だという。男性はロシア語とドイツ語しか話せなかったが、婦人は英語も話し、現在大学生の娘はそれら三か国語に加えスペイン語やフランス語、ポルトガル語も操るなど、彼らの言語能力は実に驚くべきものだった。

教会はこじんまりとしたものだったがステンドグラスが美しく、二階にはパイプオルガンもあった。礼拝後の二時間余り、パイプオルガンの隣に置かれているアップライトピアノで練習することを許可して頂いた。ボン滞在期間中、この教会には合計で三回訪問することができた。最終日に私はお礼の品としてアーヘンで買ったワインを夫妻に渡し、一緒に記念写真を撮った。

宿舎に戻った後、文法面で平松先生の協力を得ながらWhat's Upでお礼のメッセージを送った。彼らとの交流を通して、少しは実践的なドイツ語力がついたのではないかなと思う。

本研修のよかったところ

なんといっても、上述のようなアカデミックな講義を聴くことができたことだ。知的な雰囲気を出す教授たちは私の憧れである。

本研修の改善すべきところ

私は上述したSpielmanns博士のEast Meets Westというワークショップの内容について、少々疑問を感じた。博士は東洋と西洋の文化的な差異を強調していたが、あらゆる差異を文化という単語で片付けてしまってよいのだろうか、と私は考えたのである。ゆえに我々のグループが最終発表をするとき、私はヘーゲル弁証法を模した図表を描いた紙を前に貼り、「ドイツでは・・・」「日本では・・・」という二項対立に陥り思考停止するのではなく、弁証法的に両者の差異をすり合わせ、とにかく疑問を生産し続けることが重要なのではないかと発言した。

ワークショップ後の夕食の場で、私はそのような疑問を博士にぶつけた。主に、ドイツと日本の差異を文化という便利な言葉で説明するのはいささか単純なのではないか？それ以前に文化という定義を考えた方がよいのではないか？といった疑問である。すると博士は、「文化に対するあなたのアプローチは学問的だが、私のアプローチは実践的だ。異なる背景を持つ人と話す時、まずは文化という枠組みを以てお互いの差異を認識することが、コミュニケーションを円滑にする上で有用なことなのだ」と答えた。それに対して私は、「しかしそのような枠組みこそが偏見を生み出し、我々の視野を狭くするのではないか。確かに日常生活において他者を認識する時、ある種の枠組みは必要であるが、我々はその枠組みに無反省であってはならない。枠組みを破壊

し、再構築し、また破壊することを常にしなければならないのではないか」と再度尋ねた。博士は、「だがあなたの言っていることは理念にすぎない。現実問題として、そのようなことは不可能に近い」と述べた。

確かに博士の言うことにも一理あるが、両国を比較するうえで文化を強調することはやや短絡的なのではないかと私は考える。確かに海外経験のない小中学生に対する異文化理解の入門講座のようなケースでは、文化的差異を前面に押し出すことは有用だろう。だが、我々はすでに、複雑に絡み合う社会の諸要素が生み出す不条理な苦しみを経験した大学生である。次回からは、さらに一步踏み込み、文化という枠組みを疑問視するワークショップを行ってもよいのではないだろうか。

その他（自由記述）

研修中、私は移動時間などを活用してボン市内の書店で購入したニーチェの『ツァラトゥストラ』の解説を進めていた。引率の平松先生を始め、カウフマン先生、斉藤先生に助けていただきながら、なんとか序章まで読むことができた。ニーチェ読解を通じて、私は関係代名詞やum zu構文、接続法第二式などの用法を身に着けることができた。ニーチェの文体は非常に美しいので、今後も読解をつづけていきたい。

プログラム参加記

教養学部 文科三類
村瀬 志穂

午前中のドイツ語授業について

ドイツ人の先生による、ほぼすべてがドイツ語の授業は私を成長させるものだったと感じる。先生が普段上級者を教えている人であったことから、話すスピードが早く、使われる用語も難しめで、初めは全くわからなかった。しかし、そこでわからないままやり過ごしては意味がない、と思い、少人数という特徴を活用して、どんどんわからないところは先生を止めてははっきりというようにした。すると、先生も気づいて言い換えたり、ジェスチャーを使ったりして、わかるように説明をしてくれた。

さらに、間違えてもいいから何か話そう、となるべくドイツ語で先生に話しかけるようにした。そうすると、先生は欲しい単語を教えてくれ、文法の間違いがある時はきちんと直してくれた。また、辞書の意味では同じでも会話では使わない、というネイティブだからこそわかることも教えてもらえた。こうした授業を繰り返すうちに、だんだんと先生の指示がドイツ語でも一度でわかるようになっていった。

また、街中で人が何を言っているのか全部はわからなくても、単語をいくつか拾えるようになり、簡単な買い物は英語での対応をお願いしなくてもできるようになった。わからないという主張や間違いを

することを恥ずかしがらずにできるようになったことで、逆にわかるところを増やそうという意識が自然と働き、より多くのドイツ語を耳で拾おうとよく聞こうとしていたのだと思う。

午後、週末のプログラムについて

午後、週末のプログラムは大変充実していた。事前に予定されていた博物館見学やワークショップなどでは主に、ドイツの歴史や政治について学べた。特に、博物館には現物が目の前にたくさん展示されており、歴史が遠いものではなく、現実という重みをもっているものだということを深く感じさせられた。日本で見てきた博物館とはどこか展示の仕方が違い、ドイツの歴史に正面から向き合って学ぶ感覚を覚えた。また、ドイツの大学の先生に教えてもらったことは大変貴重な機会であった。難しいことも多かったが、内容はとても興味深かった。

小旅行の自由行動では、自分たちで見たいものを決めて回ることができた。私は特に城や教会の見学と食事を楽しんだ。城の周りを歩いてみるだけでも楽しめるのだが、実際に中に入ってみると、日本では見られない、豪華な天井や壁、美しい調度品など、昔の貴族の優雅な暮らしを見て楽しむことができた。中でも、アウグストゥスブルク城には特に感動した。一時間のガイドツアーでは見足りないと感じるほど、階段、壁、天井の装飾が美しかった。

また、他の城で、中が博物館になっているようなところでは、時間を忘れ、一つ一つの展示をじっくり見た。カールスルーエ城では、他の参加者が庭園を見に移動した中、自分だけ城の中に残って三時間弱も見学を楽しんだ。あまりにもじっくり見すぎて、博物館の人が色々と説明をし始めてくれたぐら

いであった。教会および大聖堂では、その大きさや美しさに思わず息を飲んだ。特に、ケルン大聖堂の壁の彫刻と、アーヘン大聖堂のステンドグラスには感動した。

また、食事は食べ歩きやレストランで訪れた場所の名物を食べ、本場の味を大いに楽しんだ。スーパーでケーキやスナックを買って、研修の参加者のみんなで夜に食べたりもした。行く前から食べたいと思っていたもののほとんどを食べられたので達成感があって嬉しかった。ドイツ料理は慣れない味もちろんあったが、全体的にどれも美味しかった。

日常生活、その他について

ドイツの日常生活は、日本と違うことが多く、戸惑うことが多かったが、慣れるとさほどの不便を感じなくなった。一例は電車である。ドイツの電車はボタンを押さないとドアが開かない。日本とは違うため、初めて先生なしで乗った時、ボタンを押すのが遅くてドアが開かず、周りの乗客に笑われながら次の駅まで行ってしまった。また、改札がなく、乗車券を確認しにくることがほぼなかったことには驚いた。しかし、何度か乗ると慣れて、先生の助けなしで好きなところに行けるようになり、多くの現地人のように券を買わずに乗ってしまう、なんてことも経験した。

また、話には聞いていたものの、ほとんどの店が18時半ごろには閉まり、日曜日は休みであるということには本当に驚いた。そして、そこで日本の便利さを改めて感じた。しかし、確かに時間のある日曜に買い物ができないというのは残念であったものの、他の日は買い物を明るいうちに済ませることで夜にゆっくりできる、という良い点もあった。さら

に、郵便局で日本へ手紙を送ったりもした。たどたどしいドイツ語でカウンターに出し、通じたか心配であったが、きちんと届いたのでよかった。また、長い列で待っている間に、ドイツ語ではなく英語であったが、並んでいる人と話せたのも楽しかった。

本研修のよかったところ

限られた時間であったのにもかかわらず、様々な都市へ小旅行に行くことができたことがよかったと感じた。決められていた博物館の見学はどれも自分では行こうと思わなかったようなところばかりで新鮮で、ツアー付きだったので多く学ぶことができた。

また、旅行中に自由行動の時間が多く設けられ、何人かの班に別れて好きなものを見に行けたのもよかった。自分たちで行く場所を決め、地図を頼りに見知らぬ街を歩くのは、小さな冒険のようでわくわくした。また、各々の興味がある分野で好きに見られた結果、その都市に対して悔いが残らなかった上、お互い見たものを教えあうという、帰った後の楽しみもできた。最後の二回の旅行は、行く都市から自分たちで計画したのも楽しかった。

また、授業で街に出てドイツ人にインタビューをしたこともよかった。何も話せないのに、と心配だったが、やってみるとドイツ人の優しさに触れることができた他、現地の人のおすすめを聞いてドイツ文化を楽しむことができ、とても心温まるものであった。私は、1945年からボンにずっと住んでいるというおじいさんに質問し、Schweinhaxenというバイエルン料理を勧められ、週末に外食した際に頼んでみた。すると出てきたのは1kgほどある大きな骨つきの豚肉であった。事前に何も調べていなかった

ため、出てきたときはとてもびっくりしたが、味はとても美味しく、ドイツのお気に入りの食べ物のうちのひとつとなった。周りの人に分けてなんとか完食し、満腹・満足で店を出た。もしあのおじいさんに聞いていなかったら、頼まなかったと思うので、とても良い思い出になった。

本研修の悪かったところ

私にとって、この研修に悪いところはとくに感じられなかった。むしろ、よかったため、もう少し長く研修が続いてほしいと思う毎日であった。あえていうならば、ドイツの他の学生との交流機会は少なかったことが挙げられると思う。しかし、ドイツ語を学び始めたばかりの私達にとっては、本研修のように見学などを通してドイツ文化に触れることのほうがよりためになると思ったので、十分であったと感じた。

その他

この研修の19日間は私を大きく成長させるものであった。第一に、もちろんだが、語学である。平日の授業が高度で積極的に学べた上、毎日生のドイツ語に触れることで、日本で勉強していたときよりも聞き取りやすくなった。フランスのストラスブールへの旅行からドイツへ戻ったときに、ドイツ語が周りに聞こえるという安心感を覚えたことには自分たちでもびっくりした。それほど、耳がドイツ語に慣れていったのだと思う。第二に、人としても成長できたように感じる。見知らぬ土地で自分たちで行動することが多かったこの研修で、人とのコミュニケーションや、計画を立てることとそのための事前調査、臨機応変に動けるようになることの大切さを

学んだ。こうして成長できたのは周りの恵まれた環境があってこそだと思う。ボンというのどかな町で過ごし、その現地の人の優しさに毎日ありがたみを感じた。そして、それ以上に嬉しかったのは研修の参加者という新たな仲間と出会えたことである。今まで話したことがほとんどなく、趣味も異なる彼らと、お互いを助け合い、また刺激しながら過ごした毎日はかけがえのないものである。これからもこの人のつながりを大切にしていきたい。

最後に、この研修で学んだこと、身につけたことを踏まえ、またさらに成長していきたい。そして、いつかまたドイツに行き、ドイツ語でコミュニケーションもって、さらに人のつながりを広げていきたい。



TLPボン・サマースクールプログラム参加者

IV 欧州研究プログラム（ESP）

欧州研究プログラム（European Studies Program: ESP）は、EUを中心とした統合が進み、政治・経済・社会のあらゆる方面で既存の秩序が変容しつつある現代欧州について、最新の研究方法と正確な知識、それに基づく洞察力を養い、日欧の架け橋として社会の様々な方面で活躍する「市民的エリート」を養成するプログラムです。東京大学駒場キャンパスの大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパ研究センターが、駒場キャンパスにある豊富な研究と教育のための人材を中心として、本郷キャンパスの教員の支援もおおぎながら、この教育プログラムの調整にあたります。

ESPの学生は、総合文化研究科の文系4専攻（言語情報科学専攻、超域文化科学専攻、地域文化研究専攻、国際社会科学専攻）のいずれかに所属しつつ、そこを足場として「欧州研究」という課題に取り組むことになります。専攻の科目に加え、プログラムの必修科目（「現代欧州研究の方法」、「スーパーヴァイズド・リーディング」）と選択必修科目を履修することによって、幅広い現代欧州研究の基礎をしっかりと身につけます。また展開科目や専攻提供科目、法学政治学研究科や経済学研究科などの他研究科科目も履修し、応用的な知識とより深い洞察力を獲得します。修士論文の作成のために現地調査を行う場合、奨学助成金制度に応募できます。

必要単位を取得し、修士論文審査に合格した修了者には「修士(欧州研究)」の学位が授与されます。

奨学助成金成果報告書

超域文化科学専攻 修士課程
石井 萌加

期にどのようなブラームス像が形成されたのかについて研究しようと考えている。1871年のドイツ帝国成立や1933年から1945年のナチス期といった歴史的事項にもみられる通りドイツ国内でナショナリズムが高まっていた時代に、ブラームスの作品や人物像がいかに「語られたのか」を考えることは、ブラームスのドイツ的要素や音楽とナショナリズムの関係を再考する契機になると考えている。

今夏の調査の主な目的は、ドイツ国内にあるブラームス博物館の訪問と、欧文献の調査であった。ブラームス博物館については、バーデン＝バーデンとハンブルクにある博物館を訪問した。二つの博物館訪問を通して、生前のブラームスについてはもちろん、ブラームスが亡くなった後の遺品等の保存や

1. はじめに

私は修士論文において、ドイツの作曲家ブラームス（Johannes Brahms, 1833 - 1897）を対象とし、19世紀後半から20世紀前半のドイツにおいてブラームスの作品がどのように受容されたか、またその時

維持という側面でのブラームス受容について考える機会ともなった。欧文献の調査は、主な滞在地であったライプツィヒとハンブルクにおいて、大学図書館や国立図書館等を利用することで行った。さらに、リュベックのブラームス研究所も訪問した。著書をはじめ当時の新聞にもアクセスでき、1933年に開催された各地のブラームス生誕百年音楽祭と時期を同じくして書かれた記事を多く入手することができた。

以下に続く二つの章で、博物館訪問と欧文献調査のそれぞれの成果について報告させて頂く。

2. 博物館訪問の成果

上述のように今回の調査では、バーデン＝バーデンのブラームス・ハウスとハンブルクのブラームス博物館を訪ねた。

まずバーデン＝バーデンのブラームス・ハウスについてである。現在その3室ほどがブラームスの博物館となっているこの建物は1840年に建てられたもので、1966年に一度取り壊しの話もあったものの中止され、創建当時からそのまま残っている。ブラームスは1865年32歳の誕生日に初めて訪れ、以降1874年まで夏に定期的に滞在した。交響曲第1番や第2番、ドイツ・レクイエムなどもここで作曲されたという。また、バーデン＝バーデンにはブラームスとの親交の深かったクララ・シューマンが住んでいたこともあり、この博物館ではブラームスとクララとの関わりや、クララの演奏活動についても知ることができた。

次にハンブルクのブラームス博物館についてである。ハンブルクは1833年5月にブラームスが生まれた都市である。ブラームスの生家は第二次世界大戦

の際に攻撃で焼けてしまっており、現在は生家跡の碑が残るのみとなっているため、生家跡の近くに当博物館が建てられた。館内には、ブラームスの自筆譜や手紙のファクシミリをはじめ写真や身近小物なども展示されている他、300冊以上の現行図書も保管されている。展示において特に重点が置かれていたのが、ブラームスの家族（家系）に関する調査とブラームスによる古典の研究、そして後の作曲家や指揮者らによるブラームス受容についてである。家系に関して興味深かったのは、ブラームスがドイツ文学の作家テオドア・シュトルムと遠い血縁関係にあったということだ。後述するように自分が研究対象とする20世紀前半、ブラームスの「北ドイツ

性」を強調するようなブラームス像がヴァルター・ニーマンの伝記に記述された。19世紀後半以降ブラームスの祖先に関する研究が進んだこともふまえると、北ドイツの代表的な作家であるシュトルムとの血縁は、「北ドイツ性」に注目した作曲家像に影響を与えたことも考えられうる。その経緯を今後も調査していきたい。また古典の研究に関してはこれまでも指摘されてはいるが、テレマン、C.P.E.バッハ、モーツァルト、ハイドンなど複数の作曲家の作品を少年時代から書き写していたという展示があった。ブラームスの作曲活動において、古典研究が重要な位置を占めることを再確認することができた。

3. 欧文献調査の成果

欧文献の調査は大きく2つに分けられる。

第一に、1933年5月のブラームス生誕百周年にドイツ各地で開催されたブラームス祭についての調査である。これについて調べるために、まずライプツィヒにあるドイツ国立図書館の音楽アーカイブに

て、ハンブルクでのブラームス祭について詳細に書かれた書籍を読んだ（Arnt, Peri: *Das "Reichs-Brahmsfest" 1933 in Hamburg: Rekonstruktion und Dokumentation*, Hamburg, 1997.）。

この著書では1933年春という時代背景としてヒトラー政権の政策が最初に述べられた後、その時期に開催されたブラームス祭について、演奏会のポスターや演説原稿等も交えながら詳細な分析がなされている。それによればハンブルクのブラームス祭では、同時期に政権の指示によって焚書が行われたり、当初予定されていたユダヤ人の演奏家が別の演奏家に交換されたりしていた。その一方、音楽祭で行われたフェルディナント・プフォールによる演説ではブラームスの①「非アーリア人」との交友関係について言及されたこと、②ロマ音楽への傾倒、③愛国主義的な《勝利の歌》についての言及が少なかったことなどを挙げ、ブラームスの存在は結局のところ第三帝国の関心の外にあったという考察がなされている。ブラームス祭に対するナチスの影響や政治的圧力にも興味があったため、この考察には少しばかり予想外であるという印象を持った。しかしながら本書では様々な雑誌や日刊紙においてこの時期にブラームスについての連載があったことも指摘されており、この指摘は今回の調査に大いに役立つものだった。というのも、この著書をもとに実際に当時の新聞をたどることができたからだ。ハンブルクでは大学図書館にて、1933年5月の日刊紙（*Hamburger Fremdenblatt*, *Hamburger Nachrichten*, *Hamburger Tageblatt*）を閲覧し、ブラームス及び生誕百年祭に関する記事を入手することができた。ライプツィヒでも市のアーカイヴ

を訪問し、同じく1933年5月の新聞（*Leipziger Neueste Nachrichten*）の中で、ブラームスについての記事を確認できた。これらの記事で言及されているブラームス像やブラームス祭の演奏批評を比較することで、ナチス政権下のブラームス像の一端を考えることができるだろう。

第二に、1900年以降に出版されたブラームス伝の比較である。ライプツィヒの国立図書館をはじめ複数の図書館でブラームスの伝記を読み進めることができた。特に注目するべきであると考えた伝記は、ヴァルター・ニーマンによって1920年に書かれたブラームス伝である（Niemann, Walter: *Brahms*, Berlin, 1920.）。この伝記の特色として著者が強調しているのは、ブラームスの「北ドイツ的」な特徴を、ヘッベルやシュトルムなどの同じく北ドイツ出身の作家の特徴と並行づけることを伝記の中で試みたということだ。この点は本書の新しさとして序文で述べられており、事実、後半の作品分析の章においても作品の特徴を「北ドイツ的」要素と結びつけて論じられていた。この伝記一冊を読むことで、ニーマンにとってのブラームス像、北ドイツ的気質、さらには当時のドイツのナショナリズムと音楽の関連性について理解できるだろう。ニーマンのブラームス伝を中心に据えて伝記比較をすることで当時のブラームス像の一端が明らかになると確信できた。

4. 今後に向けて

渡航前と比較し、今回の現地調査によって自分の研究に関して進歩したと考えるのは、以下の点である。

第一に、今回の調査を通して自分の研究の方向性や方法について見通しが立ってきたという点だ。これまでもブラームス受容の在り様をナショナルリズムの高まりという時代背景の中でとらえたいという考えはあったものの、具体的に何をどのように調査すべきかが明確化されていなかった。しかし今回現地に滞在し、どのような資料が手に入るのかを確認する中で、研究方法として伝記研究か雑誌、新聞での言説を検討するかといった方法が適していると感じた。またドイツのナショナルリズムとの関わりを論じる際に、ニーマンが伝記で強調した「北ドイツ」的要素は重要になってくると考えられるため、「北ドイツ的」という言葉に内包される要素をより精緻に考えていかなければならないだろう。

第二に、各図書館で欧文献を探しそれらを読む中で、ドイツ語文献に対する自分の中の抵抗が少なくなったと感じた。これまではドイツ語文献を読む際に少し躊躇してしまうところがあり、なかなか文献の調査を進められずにいた。しかし日本語の文献が周りにない上、限られた時間の中で自分の研究に必要と思われる文献を探すという作業を通して、ドイツ語を読むことに慣れることができたと思う。修士論文作成に向けて、これからは積

極的に読むようにしていきたい。

今回の現地調査では、ライプツィヒとハンブルクを主な滞在拠点としていた。今後ブラームスの研究を続けていくにあたり、これら二つの都市は豊富な資料にアクセスしやすい都市であることにも気づいた。ライプツィヒは図書館や書店が多く、文献を手に入れやすいという印象を受けた。特にドイツで3か所ある国立図書館のうちの一つはライプツィヒにあるが、そこには音楽アーカイヴも併設されており、ブラームスに関する資料を探すのに恵まれた環境であった。一方ハンブルクは大学図書館にブラームス・アーカイヴがあるため、自筆譜や手紙といった特に一次資料の閲覧に非常に都合がよい。またブラームスに関する資料や文献を豊富に所蔵しているリュベックのブラームス研究所にも行きやすい都市であった。再び現地で調査する際には、今回滞在した経験が大いに生きてくると考えている。

今回の調査、収集した資料を今後の自分の研究に生かせるよう、努力を続けていきたい。

最後に、今回このような滞在が可能となったのはDESKに助成金を出して頂いたからに他ならない。貴重な機会を与えてくださったことに、この場を借りて心より感謝申し上げます。

最新の情報・イベントについては、
ホームページもご覧下さい

<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

DESK事務室

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
9号館3階313号室

Tel/Fax : 03-5454-6112

E-mail: desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp